

由来記

東畑精一

シュムペーター教授の遺書が、故シュムペーター夫人の遺言にもとづいて一橋大学に寄贈された。ここにその整理が終って、『シュムペーター文庫目録』が出版されることになった。図書館側からの依頼により、この機会にこの文庫の由来とか性格などについて簡単な記述をなしておきたい。

一九五五年（昭和三十年）二月二十八日のことであつた。アメリカ大使館の文化アタッシュェのグレン・ショー氏が故シュムペーター夫人に代つて、この文庫の目録を、当時の一橋大学学長中山伊郎教授に贈呈した。その式にはアメリカ大使館、外務省、文部省の関係者のほかに、もちろん一橋大学側からも関係の人々が多数参列した。わたしも縁あつて此の席に列する喜びを持った。目録によると、単行本が一、三、五三部、雑誌（未製本）が二、八、三五冊、小冊子が一、五一、三冊、あわせて五、七〇一冊となっている。贈呈式は、普通の儀式の場合にしばしばあるような堅く、しいものでなく、極めてなごやかに運ばれた。殊に式が行われた一橋大学の本館の特別応接室は、昭和六年一月末、

厳寒の時に同大学に講演にきたシュムペーターを迎えて、多くの人が氏を中心として歓談のひとつきを持った室でもあつて、故教授の思い出などが自ら列席者によって語られた。序にいうが、その時の講演の題は「経済学徒の科学的装備」というのであつた。あの時の室の寒さはシュムペーターを少しばかりたじろがせたかもしれないが、氏はそれを気にしている当時の教授たちに、「大学は建てものではない」と言つてのけた。そして例えばイタリアのボロニア大学とかその他の例をひいて、その貧弱な大学の建てものなかで、いかに見事な研究の成果が挙げられたかを物語つたが、その話など今度の贈呈式の後の歓談の際にも語られたところであつた。ただあれほど日本訪問を望んでいた故シュムペーター夫人が、もはやこの席に列することができなかったのが、多くの人々の残念とするところであつた。夫人は日本経済の研究者でもあつた。

シュムペーター教授が急死したのは一九五〇年（昭和二十五年）一月八日のことであつた。中山伊知郎君とわたしとは、たまたま同行することとなつて同年の五月、夫人をケンブリッジのアカシア街の私邸に訪れた。曾てともにボン大学で教えを受け、それ以来の縁でいろいろと先生と交渉をもつていたので、夫人を訪れてわれわれのお悔みを述べたからである。もちろん夫人とは初対面であつた。それにもかかわらず、夫人がわれわれを遇すること手篤いものがあつた。夫人は先生の書齋にわれわれを導いて、その勉強ぶりとか、学者らしい無頓着ぶりとかを、去り逝つたものに対する深い愛情と練られた諦観とを以て語ることを暫らく、その当時全く献身的に従事していた先生の遺稿『経済分析の歴史』の整理の有様について詳しく述べた。その際われわれ兩人に対して、先生の蔵書を日本（ならびに、確かドイツ）に寄贈したい、『分析の歴史』の整理を終えてからそうしたい、という趣旨の話をされたのである。人事はかり難く、その夫人もこの書物の出版を見ないで、一九五三年（昭和二十八年）七月に逝去した。遺言によつて、蔵書はその執行者を通じて一橋大学に贈られることとなつた。中山伊知郎君のほかハーヴァード大学で親し

く教授について学ぶこと多年であった都留重人君が、ともに一橋大学の重鎮として教授たるからには、この処置は当然のことである。かくて、ここにシュムペーター文庫が一橋大学図書館に加えられることとなったのである。

この文庫は普通に経済学者などの名を冠するものとは、いささか性格を異にしている。シュムペーターはいわゆる蔵書家ではなかった。珍本を漁り稀覯本を蔵することただそれだけのために為すというタイプの人ではなかった。必要に応じて読書をするという人であったし、また単に経済学文献のみが彼の読者の対象でもなかった。広範囲の関心の領域をもっていた。また「楽しみやレクリエーションのためにする読書——彼は伝記、それも数巻にわたる伝記を読むのを好んだ」人でもあった（『分析の歴史』編輯者序文）。また自分の蔵書でなくて、便宜に応じて図書館を利用した人であった。こういった人の蔵書がどういう形態のものであるかは、恐らく何びとにも見当がつかないであろう。

それのみではない。彼はオーストリアの若干大学にも勤めたし、後にはドイツのボン大学、更に一九三二年後はハーヴァード大学に移った。殊に最後の場合には、ドイツでの蔵書は梱包されたままボン近郊のユーリヒ村に疎開されてあったが、戦争によって爆撃されてしまった。その残骸から僅かに一〇〇冊ばかりの書物——それも大部分は英文の伝記類——が救いだされて、戦後アメリカに送られたに過ぎなかった（前掲、序文参照）。こんな次第でドイツ時代とは蔵書の点で断絶しているといわねばならない。

かくて此の蔵書は恐らく一九三二年、彼がハーヴァード大学に職を転じてからの書物を中心としているものとなった。いわゆる手沢本を中心としているもの、また彼の書齋（それは三つあった。一つはハーヴァード大学リタウアー・センターのもの、二つはケンブリッジの私宅の書齋、最後はタコニックの別邸内のものというふうに分散しており、彼はそのいずれにおいても研究をしていた）に集まってきたものからなりたっているように思う。英文のものが

大多数なのは当然であるが、殊に小冊子類となると、ドイツ文、フランス文、スペイン文、イタリア文、スカンディナヴィア文のものなど、国語的には極めて多彩的であり、彼の読書範囲や交友範囲がいかに広汎であったかを良く示していると思う。いづれにしても国際的名声をもつ一経済学者のおよそ二十年の間に手に入った書物が、いかなるものであるかを充分に示していると思われる。

ただこれだけを手沢本と呼びきるのには、いささか躊躇する点もある。こうである。彼の『景気循環論』（一九三六年）に引用されている老大な文献は、必ずしも悉くが此の文献目録のなかに見出されない。また晩年の遺著『経済分析の歴史』（一九五四年）の完成のための八、九年に亘る古い文献に対する「夢中になった」飽くことのない研究読書の跡を示すものは、殆んど全く見出されない。これはハーヴァード大学のクレス文庫が専ら利用されているからであろう。現に同文庫の係員であるドロテア・リーヴス夫人は、シュムペーターがこの文庫を最も多く利用した人のひとりであることを、わたしに告げたことがある。

シュムペーターの手沢本のなかには、例えばケインズの『一般理論』や『貨幣論考』とかが見出されると、何びとも期待するであろうが、しかし目録にはどこを探しても現われてこない。最も不思議に思われるのは、例えば『分析の歴史』のために三十ページ近くを割いているのにかかわらず、ワルラスの『純粹経済学要論』が含まれていない点であろう。またシュムペーターは自分の著書については、評価が厳しくて深く顧みず常に一步の先きを凝視していた学究であった。いつも自らを乗り越えていくところに先駆者の役割があるが、まさにそういうタイプの人であった。そのためであるが、彼の雑誌論文の抜き刷りの若干を除いて、一切の著書や論文が此の文庫には含まれていない。これは彼の性格を思うと、必ずしも期待はずれのこととは考えられない。

夫人自身の蔵書も若干はこのなかに含まれている。夫人の蔵書票が貼ってあるからである。しかし前に述べたドイ

ツから送られた伝記類はどうなったか。この目録には見いだしえないようである。このように考えてみると、曾て夫人がわれわれに語られたように、シユムペーター蔵書（ならびに夫人の蔵書もか）の他の半ばが、ドイツ（或いはオーストリア）の大学に贈られたのであるかもしれない。そうなると此のシユムペーター文庫は、世界のどこかに兄弟を持っていることとなるが、近時の世界の経済学者のなかでシユムペーターほど、国際的活動の部面の広く深かったものは少ないから（彼は「国際経済学会」の初代の会長となる筈であった）、この兄弟文庫の存在は、それにいささかふさわしいことのものである。

総計五、七〇一冊は此の目録のなかで見事に整理されている。合計して一、五〇〇以上となる小冊子（大半は雑誌論文の抜き刷り）と、合計して一七〇種以上の雑誌（ロシア語関係のものを除いて世界の主要な経済雑誌が悉く存在する）とが、それぞれ一括して整理され、その他の単行書は——恐らく一橋大学図書館のルールに従って——十九の項目のもとに分類されて挙げられている。

これについては次の二点が特に注目されるべきであろう。一つはシユムペーターの手沢本たることを目録の上に表示した処置である。彼は、黄色の紙片に書き入れ（その多くはオーストリア式の古い速記文字によることである）をなし、これを該当の書物に挿入しておく慣わしがあったが、そのことの有無がこの目録に示されている。また、たまたま同じ頃に原著者から彼のもとに来た書翰がその書のなかに添付されているが、そのことも目録に記入されている。第二は学術雑誌を挙げている場合に、欠号の少ないものはその欠号を挙げ、欠号の甚だ多いものは在庫しているもののみを挙げている。これは雑誌の読者に対して最も親切な処置であると思う。わたしは此の場合に図書館の当局に対して一つの希望を申入れておきたい。どの図書館も学術雑誌の欠号とかバックナンバーとかの補充には苦しんでいる。この際シユムペーター文庫から必要なものを抜きだして、一橋大学図書館の在来のものに補充して、完璧な一

連の雑誌類をそろえるのに一歩接近してほしいということである。目録のうえではもちろんシュムペーター文庫のものであるが、雑誌としては一連のそろったものとして整理製本されて読書子の便に備えてほしいものである。文庫は目録のうえにのみ存在し、図書館は全部を打って一丸となして再整理するという希望なのである。

この目録を読んでいるとシュムペーターの勉強の仕方について、いろいろと思いださせるものがある。その若干を挙げよう。

注目される第一の点は数学書についてである（目録では Science & Technology の項）。シュムペーターが書物に書き入れの紙片を挿入していることで彼の関心を測るならば、恐らくどの部門の書物に対するよりも、数学書の場合の方が最も多いことが、これを示すかのようである。ハーヴァードに移ってから後に（或いはそれ以前からであるかもしれない）、彼は相当の年齢となつてから高等数学の研究を始めたと聞いたことがあるが、この目録はそのことを十分に想像せしめるものがある。数理的思考は論理を正すという意味で学問の不可欠の条件であるが、推理力と抽象力の強かつた彼にして、なお斯かる研究に深く沈潜していたことは後学のものを打つところがある。ケインズが静学について果したと類して、シュムペーターは動学の「一般理論」を完成したいという志向をいただいていたが、数学的思考に沈潜していたことは、恐らくその準備であつたであらう。

また此の点と関連がないわけではないが、彼は経済理論の単なる数量性ということから一歩を進めて其の数値性に至るべき道を求めた。概念が統計的に操作されるものたることを説いた。そうした点から、彼の手沢本のなかで書き入れの挿入が多いのは、此の種のことに関連したものに見られる。

中山君とともに夫人を訪れてシュムペーターの私宅の書齋に入ったことは既に述べた。その際書架に若干書物を見たが、試みにマーシャルの『経済学原理』（第四版）を取りだしてみた。無数に多くの紙片が挿入されてあつたし、

さらに（彼の常にやったところらしいが）多くのページの端が折つてあつたのを覚えてゐる。これを見ただけでも此の書が徹底的に検討され、彼の思考の糧となつたと考えざるをえない。彼の『分析の歴史』を読むと到るところでマーシャルの『原理』を挙げてゐる。その箇所は五十回以上に及ぶであろう。攻究・穿鑿・評価、つくして余すところがない。マーシャルを以て単に部分分析に終始したとなすことは、彼の極力排したところであつた。そのなかに一般均衡分析の萌芽たるべきものを探求してゐる。殊にその数学付録二十一を高く評価してゐるが如くである。彼はたんにマーシャルを研究したのではなくて、マーシャルを通じて経済学の研究の仕方を研究したと言ひうるであろう。マーシャルを抜くという成果がそこから生れた。

彼がアメリカに渡つてから『景気循環論』を執筆するために多大のエネルギーを割いたことは周知知られてゐるが、その執筆の必要のためであつたか、諸国殊にアメリカの経済の過去の発展を描いたものが注目されてゐたやうである。書き入れの挿入の多いのは従つて、コウルス委員会とか、ナショナル・ビューローとか、或いはブルーキング・インスティテューションとかの出版にかかるもの、すなわち、主として実際の経済の動きを描いた書物に対してであることがわかる。

しかしこれは単に景気循環の研究のためばかりではなくて、彼のそもそもの研究の態度ではなかつたかと考える。彼はいうまでもなく経済理論の雄、理論経済学の巨星であり、経済学の歴史に殊のほか大きな関心をいだいてゐた。およそわれわれの考えるところから察すると、こういつたタイプの経済学者の蔵書は、「理論」の書物とか古典とかに満ちてゐて、他の経済史とか経済統計とか経済事情誌とかに欠けてゐるであらうと想像されやすいであらう。しかしこれは敢てアメリカの時代のみならず終生シユムペーターにとつての現実ではなかつたやうである。わたしは曾て一九二九年の或る日、ボンにあつたとき彼の秘書に案内されて彼の留守中の書齋に入つたことがあつた。それは極め

て大きな寝室であつて四周に雑然と多数の書物が積み重ねられてあり、当時逝去したばかりの夫人のベッドの上には幾十種類の雑誌が、これは幾分整理されて積んであつた。これらの雑誌はもとよりこれらの書物の多くが、いわゆる理論的なものではなくて、実は實際問題を扱つたものであつた。鉄工業の雑誌もあれば化学工業の經濟書もあるという有様であつた。

シュムペーターの求めたものは果してなんであつたか。もとよりわたしの貧しき頭脳では到底これに論及しえない。しかし一つのことだけは、これについて考えることができる。いったい經濟理論なるものは、どこから生れてくるか。經濟の現実以外にはありえない。そこに理論の胚芽があり、教師があるのである。この現実を理解し見抜く要具こそ經濟理論にはかならない。さらに理論の「進歩」はどこからくるか。要具そのものの洗練はどうして可能なのか。その重要な契機は經濟の實情そのものになり、その変化にあるとなしうるのである。理論と經濟の實際とは、この見抜く力の能不能、適不適を經濟學者に教えながら、相互に琢磨し互譲し応酬しあうのである。そういう次第で經濟についての經驗的知識を常に積み重ね反省していくことは、本来の理論家たらんとするものにとつては必須の条件である。經驗的地盤がなくては、既成品となつた理論を理解することだけではできうるのであるが、しかし人をして其の發展、創造へと駆りたてることができない。この意味で古來偉大なる經濟學者は經濟の實踐に精通していた人であつた。また現実——その時代、制度、動き——に対して師に対するように謙遜であつた。ただ實踐家とは、實際を見る視角が異つただけである。シュムペーターはこういった研究者であつた。彼が謙遜であつたのは、たんに自身自身に対してのみではなかつた。

シュムペーターの手沢本はいまやわれわれの手に整理されて、万人の閲読を待っている。經濟理論に趣向をいだくものは、彼の蔵書のなかから經濟の實情を描いたものを読むべく、經濟の實踐に関心を寄せるものは、經濟の理論

書をこの文庫のなかに求むべしと言いたい。(一九六一年九月)

〔本稿は、The Catalogue of Prof. Schumpeter Library 一九六二年、より再録したものである〕

(東京大学名誉教授)